

ツノのない鬼

「鬼」と聞くと「桃太郎の鬼が島」、「地獄の衛兵」など思い出す。これらに登場する「鬼」は牛の角と虎のパンツをはいているのが通例である。ところで鬼はなぜこんな姿をしてるかご存知か。

昔の中国では方位を表すのに十二支を使った。したがって日本でも同じくである。北は「子」、東は「卯」、南が「午」、西が「酉」という具合である。ところでこの方法では 360 度を 12 分割するために 1 単位が 30 度になる。つまり東南西北の中間である東南・南西・西北・北東は十二支では表現できないのである。

日常使いやすい方位であるこれらを表現できないのは困る。そこでこれら方位を東南から順に「巽」「坤」「乾」「艮」の字を充てて表現している。

日本では、この 4 文字にその方位をはさむ十二支名を並べて訓をつけている。「巽=たつみ」「坤=ひつじさる」「乾=いぬい」、そして「艮=うしとら」である。

家を建てるときたいした易の知識もないのに、唯一「鬼門」を気にする私たちである。鬼門は「北東」方向、つまり、鬼門=うしとらとなる。

しつこすぎたかもしれない。そう、それで鬼は牛のツノとつけ、虎のパンツをはいているのである。なぜ牛のツノと虎のパンツかって、逆を想起すればいい。虎の牙と牛の柄のパンツじゃタイガーマスクが水玉のオムツをしているみたいで、凄みに欠けると思わないか。

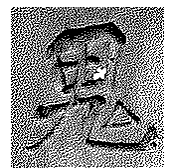
本題に帰る。「鬼」は「死者の魂」を意味する文字である。派生する文字で「鬼」の下部の「ひとあし」と「ム」を取り外した「田の上にノ（音：フツ）」の字がある。この意義は「鬼の頭」だ。しかし「頭蓋骨」とする字書もあって、「鬼」には死体を指す意義もあるようである。

白

さて、鬼にツノがないのはいったい何者であろうか。

日本の社寺では「鬼」の第 1 画の「ノ」をはずした「おに」を使うことがある。「鬼子母神」^{きしぼじん}「施餓鬼」^{せがき}などの「鬼」は第 1 画が省略されている。

ご存知のように「鬼子母神」は人の子を食うという業^{ごう}を持つ神で、仏様の導きで改心し以後は子供を守護するようになった。いま東京では下谷と雑司が谷に祀られているが、祀られたのは子供の守護神となったあとだからすでに鬼ではない。そこでツノの取れた「おに」の字を充てたものである。（写真は目白台



の鬼子母尊神出現所の碑。出現所とは雑司が谷で祀られている鬼子母神像が井戸の中から発見

された場所である。)

また、お寺は死者の菩提を弔うのがお仕事である。お寺で供養された霊は仏様の手中で慈福の中にいるはずだ。「鬼」は亡霊である。亡霊は供養されていないから現れるのだ。すると論理上お寺が供養する死者の霊の中に「鬼」はいないはずである。お寺としても寺の中に鬼が居ては困る。したがって施餓鬼法要の「おに」は「ツノのない鬼」を書くのである。

字画を省く事例はまだある。

東京日野市高幡に金剛寺というお寺がある。「高幡不動尊」として名を馳せている。お寺の隣のビルの屋上に「高幡不動尊」の看板がある。多摩モノレールの高幡不動駅からよく見える。この看板では「幡」の傍の「番」の第1画が省略されている。金剛寺の方にかがったところ縁起などに特にいわれはないそうである。この看板の発注者はお寺ではなく近所の金融業者の方で、さらに製作した看板業者が明治以前に書かれた文書にこの字形があったのを見出し採用したものであるとのこと。

幡

実はこの字形が本当の字体であると言う人がいる。古代からの日・中の文書を見ると「幡」と書かれているほうが圧倒的に多いというのである。

「幡」の傍の上部分つまり「采」は獣の爪先が割れている偶蹄目の動物を示す形で「𠂔」(金文)、「𠂔」(篆書)である。篆書では上部が右にカーブしているものの「ノ」の形になっていないからこの線を2画で書くのはおかしいと言うのが論旨である。

しかしその論で行くと、「采」と「米」が同一字形になってしまい、釈迦の「釋」は「釋」になってしまう。「釋」は「漬米」という意義を持つ文字で「釋」とは別に存在するのである。

また独立した文字で「番」はあるが「番」はない。どうみても「幡」を「幡」と書くことには無理がある。

「幡」の傍上部はこの字が「ハン」という音を持っていることから「采」でなければならない。古代人が「采」を隷書化する時に、豚毛の筆に木簡・竹簡という任意に線を引けない筆具をもって「米」との差別化のために頭部の曲がりやを「ノ」の形に書かざるを得なかったことを理解してやって欲しい。参考までに「米」は「𠂔」(象形)、「米」(篆書)である。

高幡不動尊ではこの文字に対して意味付けしてなく印刷物などでは「幡」を使っているそうであるが、ひとつのデザインとして、あるいは「高幡不動尊」を特化するものとして有効ではある。

宗教から外れるが、渡辺の「辺」に至っては多くの省略字形がある。JIS でコード付けされているものは「辺(正字)・邊(旧字)・邊(旧字の同字)」の3字だが、これ以外に無数のバリエーションがある。一般の漢和辞典では載せていないか、載せていても誤字として扱われている。それでも各渡辺家の ID として使われているようだ

この話題は詳しくは別章でお話しようと思う。

こうした変わった字体(異字体)を見た方から問い合わせや苦情がある。苦情のおおかたの主旨は「学校で教えている文字と形が違う。子供が混乱する。」ということである。

学校で教えている漢字は、小学校では教育漢字(1006字)であり、中学校では常用漢字のうち教育漢字を除いたもの(939字)である。だれが決めたか知らないが、教育関係では字形の画一化傾向が高く、基準とするのは教科書体の書き方で、書き方による字形の若干の変化(字体の揺れ)を認め難い状況がある。このため隷書・行書・草書などの各書風で書いたものは間違いと称される可能性が大きいのである。一昔前は、定規で各線の長さを計りながら漢字を書いた子供もいたという冗談めいた話もあるくらいだ。

中学校教科書では書体が小学校の楷書(教科書体)から明朝体になる。学校論理の漢字の世界から一般社会への旅立ちをうながすものと思う。一般社会では新聞も図書もおおかた明朝体であり、教科書体で組版したものをみたことがない。

明朝体はどうやら隷書がそのベースになっているようで、教科書体(楷書体)とは字形が違うものがある。活字中毒の小学生が、学校で教えない明朝体に先に慣れ親しんで、その字形を書いてしまうと場合によっては減点のうき目に遇う危険性がある。教育家の親として明朝体の印刷物を子供に見せてはいけない。言っておくがこれは皮肉である。

「鬼・幡」の例では、「鬼」は常用漢字で中学校1年に習う文字だから騒ぎの元になるのだろう。「幡」は常用外の漢字で学力評価の外なのだから、とりあえず子供に悪影響はないはずなのだが、高幡不動尊に問い合わせや苦情はやはりあるそうだ。実は私も問い合わせ1件を提供した。

この著作権は岡和男に帰属します。
©Kazuo Oka 2000